琉球王国文化遺産・集積再興事業におけるべっ甲巻き三線の調査報告

篠原あかね1) 宇保朝輝2) 仲嶺 幹3)

Report of the Sanshins using tortoiseshell, Ryukyu Kingdom cultural heritage collection and restoration project

Akane SHINOHARA 1), Tomoki UHO 2), Miki NAKAMINE 3)

1 はじめに

琉球王国文化遺産・集積再興事業は、内閣府の沖 縄振興特別推進交付金(一括交付金)を活用して、 沖縄県が実施している事業である。本事業は、琉球 王国の崩壊と大戦により、県が多くの文化遺産を 失った経緯のもと、残された文化財から得られる学 術的知見や科学分析等の情報を集積し、王国時代 にあった8分野の手わざ(絵画、木彫、石彫、漆 芸、陶芸、染織、金工、三線)と文化財を模造復元 することを目的としている。併せて、模造復元品を 通じて沖縄の手わざの力を内外へ発信し、琉球王国 文化をブランドとした文化観光拠点としての沖縄 をアピールする。平成27年度より実施設計を行い、 平成28年度より65件の文化財を模造復元している。 令和元年度以降は、模造復元品と製作時に得た知見 を通して王国時代のものづくりの様相と文化を紹介 する展覧会を開催している。本事業については、こ れまでに当館の博物館紀要第11号等でその成果を 報告している。。

本事業で選定された8分野の手わざの中に三線があることは、三線が琉球・沖縄の文化史上重要な楽器であり、なおかつ伝統的な技術によって製作される美術工芸品であることを示している。本事業では、6件の三線を模造復元しており、うち5件は令和元年度に完成した[※]。残る1件は、令和2年度に完成予定の蛇皮線である。原資料^{**}は、明治17年(1884)

に当時の獨逸政府からの依頼で日本政府が収集した 琉球関係資料のひとつで、現在は東京国立博物館が 所蔵している^v。来歴が明らかな点で基準作となり 得る資料だが、蛇皮線は、いくつかの点で多くの三 線と異なる特徴を持っている。その一つが、棹の4 力所で木材を接いでいる点である。この接ぎの詳細 については(園原2020)で詳しく述べられている ので、そちらを参照されたい。そして、もう一方の 特徴は、胴(チーガ)をべっ甲で装飾している点で ある。べつ甲を使用した三線の現存例は、蛇皮線含 めて5例しか確認されていないため、希少であり、 なおかつその製作や使用目的など実状が知られてい ない。さらに、べっ甲の加工技術が現代の三線職人 に継承されていないため、製作技法について多くの 謎がある。本稿では、未だ充分に知られていない べっ甲巻き三線について取り上げ、模造復元のため に行った調査結果を報告することを目的とする。な お、胴巻きにべつ甲を使用した三線を示す名称が確 立されていないため、本稿ではべつ甲巻き三線と呼 ぶこととする。

2 三線の胴巻きについて

胴巻きは、手当や、ティーガーともいい、三線の 胴部側面を覆う付属品を指す。べっ甲巻き三線につ いて述べる前に、胴巻きについて確認しておきた い。現在の胴巻きは、胴の側面全体を覆う形が一般

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒 900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3 - 1 - 1 Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

²⁾ (一財) 沖縄美ら島財団 〒 903-0815 沖縄県那覇市首里金城町 1-2 Okinawa Churashima Foundation, 1-2 Kinjo-cho, Shuri, Naha, Okinawa, 903-0815 Japan

³⁾ 沖縄県三線製作事業協同組合 〒 902-0067 沖縄県那覇市安里 360-7 和光マンション 1 階 Okinawa Prefectural Sanshin Craftmen Cooperative Association, c/o 1st floor Mansion Wako, 360-7 Asato, Naha, Okinawa 902-0067 Japan

的である。布製が主だが、持ち主の好みによっては 革で作られるなど多様化している。胴巻きには、演 奏する際に蛇皮が手元に引っかかることを防ぐため の保護の役割と、装飾の役割がある。胴巻きについ ての先行研究は、筆者が調べた限り、ほとんど見当 たらない。戦後の三線研究は、池宮喜輝らによって 進められてきたが、三線の価値は棹にあると考えら れていたため、胴については長らく研究がされてこ なかった経緯がある。胴部は虫食いされることが多 く、消耗品として捉えられていたため、胴および付 属する胴巻きの現存例が少ないことも研究が進まな かった要因と考えられる。近年になり、園原謙らの 研究によって胴の価値が再認識され、「三線 盛嶋 開鐘 附胴」(沖縄県立博物館・美術館蔵) のよう に古い胴が付属する三線に対して「附胴」の語を付 すなど、新たな認識が広まりつつある。「三線 盛 嶋開鐘 附胴」はじめ、名器として知られる王国時 代の三線の中には、胴の内部に複雑な彫り込みがさ れる例があることから、当時の職人が良い音を求め、 棹だけでなく胴の内部にも工夫を凝らしていたこと がわかっている。

古い胴はもとより、胴巻きが現存する三線の例は ごくわずかである。蛇皮線のようなべっ甲製の胴巻 き以外では、「三線 志多伯開鐘」(個人蔵、沖縄県立博物館・美術館寄託)や「三線 富盛開鐘 附胴」(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵)の例が挙げられる。

「三線 志多伯開鐘」の胴巻きは、布製で胴の右側面のみを覆う形式である。(図1)複数の布を合わせて厚みを出し、両側に紐をつける。御所車模様紋織に赤い平織布を重ね、紐で装飾的に縁取っている。中央には一文字の紋を配す。使用される布や状況から、胴巻きが作られたのは明治から大正以降かと考えられる。

一方の「三線 富盛開鐘 附胴」の胴巻も布製で胴の右側面のみを覆う形式である。(図2)表面は綾地浮織で桜と牡丹模様が表され、裏面に「壬午正月朔日仕立 富盛開鐘」と墨で書かれている。壬午は、1942年か1882年にあたると考えられる。両者とも、棹については19世紀の作とされているが、胴巻きは後補と考えられ、明治以降のものと推測される。特筆すべきは、どちらも現在のような側面全

体を覆う形ではなく、右側面のみを覆う形ということである。他の作例を確認しても、古い布製の胴巻きが現存する場合は片側のみであることが多い。これらを根拠とし、琉球王国文化遺産集積・再興事業において復元した蛇皮線以外の4件の三線については、共通して右側面のみを覆う布製の胴巻きを模造復元した。



図1 「三線 志多伯開鐘」の胴巻き





図2 「三線 富盛開鐘 附胴」の胴巻き

先に述べたように胴巻きそのものの現存例が少ないため、絵画資料に描かれた三線から胴巻きを確認してみたい。まず、王国時代の三線を描いた資料として、「琉球楽帖楽詞楽器之図」(沖縄県立博物館・美術館蔵)が挙げられる。寛政3年(1791)に作成された冊子で、演奏者や楽曲の歌詞とともに20点の楽器が図で紹介されている。この中の「琉三絃」の頁では、棹に「黒檀」、胴に「蛇皮」そして、胴巻きとして「胴鼈甲」と留め具として「鋲角」と図示されている。(図3)この資料から、18世紀末には、蛇皮線と同じように琉球製の三線の胴巻きにべっ甲を使用していたとわかる。なお、別頁の「唐三絃」

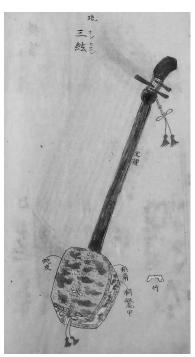


図3「琉球楽帖楽詞楽器之図」(部分)

では、「琉三絃」と同じく黒檀の棹と蛇皮を使用しながらも、胴巻きには、「紫檀」と「黒檀」が図示されている。同じ三絃でありながらも、材料から明確に使い分け、さらにその様子を描き分けていたことがわかる。

次に、「琉球人座学并躍之図」(沖縄県立博物館・ 美術館蔵)は、天保3年(1832)に慶賀使として 江戸立した琉球人が、江戸で舞楽を披露する様子を 描いている。その中の一場面で、4名の楽師が並ん で三線を演奏している。(図4)ここで描かれてい



図4「琉球人座学并躍之図」(部分)

る三線に注目すると、房飾りがついた棹と蛇皮を 張った丸い胴が描かれているが、胴側面には、蛇皮 の模様が繋がって描かれており、胴巻きはないこと がわかる。

以上の2点は18~19世紀の作品である。ではさらに時代が下った作品ではどうだろうか。「三線を弾く琉球美人」(沖縄県立博物館・美術館蔵)は、明治時代に描かれた作品である。(図5)女性の衣服や手元のハジチなど丁寧に描いているが、三線の胴巻きは描いていない。複数の絵画資料を確認したところ、三線が描かれる場合は、胴巻きは描かれないことが多いことがわかった。絵画が必ずしも現実通りに詳細を描いているとは限らないが、考察の一助にはなるだろう。



図5「三線を弾く琉球美人」(部分)

以上のように、現存する古い胴巻きがべっ甲製もしくは、片側のみを覆う布製であることと、三線が描かれた絵画資料から、王国時代には側面全体を覆う現在の布製の胴巻きが一般的ではなかったことが推測される。ここからは、べつ甲巻き三線の現存例を確認することで、その実像を探ってみたい。琉球王国文化遺産集積・再興事業にて蛇皮線を復元するにあたり、製作の参考とするため4件のべつ甲巻き三線を調査した。その調査結果の概要を報告する。

3 調査資料の概要

資料名称、所蔵、法量、所見の順に記した。資料 名称は、所蔵者が使用している名称を採用し、名称 がない場合は「三線」とした。また法量は、所蔵者 が公表している全長を記載し、ない場合は調査で計 測した全長を記した。

(1) 蛇皮線

所蔵:東京国立博物館

法量:全長77.5cm

所見:

来歴について/明治17年(1884)に当時の獨逸 政府からの依頼で日本政府が収集した琉球関係資料 のひとつ。この時に集められた資料は、美術的歴史 的な価値が高いものではなく、一般的に普及してい るものとされたようだ。(佐々木ほか1996)しかし、 同資料群に含まれる染織資料の中には、明らかに士 族階級以上の人々に受容されていたと考えられる品 物も複数含まれている。広く収集品を選定する中で、 一部の高級品も対象としていたことがうかがえる。 そのため、蛇皮線についても、一般的に広く普及し ていたものではない可能性がある。収集目的から琉 球で製作されたものである点は間違いなく、年代は 王国時代末期と推測される。現在は伝来していない 接棹とべっ甲製胴巻きの技術が使われている点で貴 重な作例である。

棹について/棹は、天、野、鳩胸、心の4ヶ所に接ぎがある。棹の特徴については、CT撮影の結果とともに(園原2019)で詳細に報告されているため、ここでは割愛する。呂色塗で仕上げられているが、心には塗りがない。糸蔵には金箔の塗布が確認できる。爪裏は総取り。

胴について/胴の内部を確認すると、内側は荒い削り痕のみで、規則的な彫り込み等の工夫はみられない。蛇皮に接する上下が斜めに面取りされている点が特徴的である。胴の内径を広く取ることで、音の反響を導くための工夫と考えられる。また蛇皮の目が細かいことから、小型のニシキヘビを使用したことがわかる。裏面左上部に亀裂があったようで、さらに目の細かい蛇皮(アオダイショウか)を当てて後年に修理している。胴の側面に4.3cm幅のべっ甲を巻き、上下に黒い鯨のヒゲを当て、象牙の鋲で

留めている。べっ甲はわずか0.5mm程度と薄い。蛇皮とべっ甲の間には、和紙を挟んでいる。べっ甲の模様を美しく見せるための工夫と考えられる。べっ甲は胴の左右それぞれで2枚ずつ使用されてる。左側では端を合わせ、鳩胸側から1枚目が21.4cmと2枚目が7cmで覆うのに対して、右側では鳩胸側から1枚目が19.5cmと2枚目が10.8cmで、2枚の境目で1.5cm程度重ねるなど統一感がない。糸掛けで隠れる猿尾部分にも上下に正方形に切ったべっ甲を貼るなど、全面をべっ甲で覆う意識が見られる。鯨のヒゲも左右非対称に合計7本を重ねながら使用している。胴巻きを留める象牙の鋲は、頭が半円形で、左右で10点ずつ、計20点使用している。

その他/カラクイは、コクタンに象牙の飾りをつけた六角丸溝象牙飾りと呼ばれる形である。ウージルはオリジナルに近いが、ミージルとナカジルはシタン製で後年取り替えられたと考えられる。また弦も、大和の三味線や奄美地方の三線に使用される黄色の絹弦のため、後年に取り替えられたものと考えられる。緑色の糸掛けは、現代の糸掛けよりも長い古い型式である。

図 $6 \sim 10$ /東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives.





図6 全体



図7 胴部 左側面



図8 胴部 左上拡大



図9 猿尾部分、糸掛け



図10 天とカラクイ

(2) 三線(短)

所蔵:徳川美術館

法量:67.0cm

所見:

来歴について/寛政2年(1790)もしくは寛政8年(1796年)の江戸立の際に琉球使節団から尾張徳川家に献上された21点の琉球楽器一式の中の1点である。製作年代は献上された時期を下限とし、18世紀後半と考えられる。また将軍家へ献上されていることから、当時の三線の中でも最も手間をかけて作られたものだろうと推測できる。

棹について/棹は上質のコクタン製で、全体に摺漆が塗られている。与那城型に近い型だが、乳袋にふくらみがある特徴がある。全体的にシャープで角が立っている仕上げで、端正な印象を受ける棹である。爪裏は総取りで、心に銘書きなどは見られない。心の根元に薄い木板を数枚ずつ貼り合わせている。胴との当たり具合を調整するためと考えられるが、通常は心ではなく胴を加工することで調整するため、珍しい例である。根元を避けて、心にも摺漆を塗っている。

胴について/胴内部に特殊な加工はなく、丸ノミ で上下から中央に向かって削ったため、中央に薄く 稜線が確認できる。蛇皮の鱗目が細かいことから、 蛇の首に近い場所を使っていることがわかる。^{vi}胴 巻きには、左右それぞれに1枚ずつべつ甲を使って いる。象牙の鋲は左右それぞれ20個ずつで合計40 個使用している。形は半円型であるが、(1)蛇皮 線に比べ、扁平な形状である。鯨のヒゲは左右1本 ずつで、幅は5mm程度である。べつ甲の下には同寸 の白色和紙を挟み、べつ甲の模様がはつきり見える ようになっている。右側に当てられたべっ甲の鳩胸 側に2つの穴が確認できた。また、鯨のヒゲにも4 か所の穴が埋められた形跡があった。製作後に胴巻 きを一度外して、付け直した可能性が考えられる。 また通常、楔打ちで蛇皮を張ると糸の縫い跡が残る が、本資料では縫い跡が確認できなかった。

その他/カラクイにはカリン材を使用している。 カラクイは通常コクタンで製作されるため、後補の 可能性がある。ウージルにオレンジ色の房飾りをつ けている。糸掛けも同種の組紐で編まれている。オ レンジ色の房飾りは、先に挙げた(図4)「琉球人 座学并躍之図」で琉球人が演奏する三線と同じであることからも、歓待の場で使用された三線であることがわかる。

図 $11 \sim 16$ / 徳川美術館所蔵 © 徳川美術館イメージアーカイブ / DNPartcom.



図11 全体



図12 カリン材を使用したカラクイ



図13 胴部左側面



図14 心の根本



図15 鯨のヒゲに補修跡がある

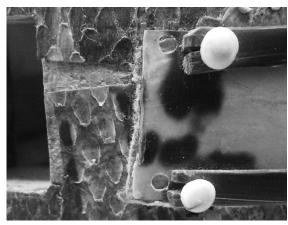


図16 べっ甲に穴がある

(3) 三線

所蔵:一般財団法人沖縄美ら島財団

法量:78.7cm

所見:

来歴について/2013年に一般財団法人沖縄美ら 島財団が収集した三線。同財団が2007年に復元し た徳川美術館所蔵(2)三線(短)の模造復元製作 をした後、類例の少ないべっ甲や鯨のヒゲを使用した類似資料として収集された。来歴については不明である。

棹について/棹の材料はコクタンで摺漆が施されている。真壁型と与那城型に近い型である。(2) 三線同様に全体的に角がシャープに仕上げられている。

胴について/べっ甲が左右1枚ずつ使用している。鯨のヒゲは糸掛けの部分も繋がっており、上下に1本ずつ使用している。象牙の鋲は左右それぞれ14個ずつで合計28個使用しており、扁平な形状で比較的大きさや形状の違いは少ない。べっ甲や鯨のヒゲに一部割れや欠損箇所は見られるが、(1)蛇皮線のようなうねりなどはなく、全体的にきれいな状態である。チーガ内部は、上下から中央に向けて丸ノミで削られ、中央が少し盛り上がっている。(2)三線(短)と同じような削り方となっている。

その他/カラクイはコクタンを使用し先のほうに 象牙が取り付けられている。(1)蛇皮線と同様の



図17 全体

形態であるが、掘り込みなどの装飾的な施しはなく、 六角形に面取りした形状である。全体的に(2)三線(短)に近い仕上がりになっており、同じ職人も しくは同じ工房で製作されたか、それを見本にして 製作した可能性も考えられるほどである。付属品と して糸掛けや駒、バチが本土の三味線の形態となっ ているため、本土で楽器として使用されていた可能 性がある。



図18 胴側面 (猿尾側)



図19 カラクイ

(4) 三線

所蔵:東京音楽大学付属民族音楽研究所

法量:79.7cm

所見:

来歴について/作曲家の伊福部昭氏が昭和22年頃に京都の骨董屋から収集したという明清楽器13点のうちの1点。これらの楽器は、作曲活動で実際に使用していたという。

棹について/南風原型に近い形で、全体的に角が立った印象である。良質のコクタンを使い、摺漆塗りで仕上げている。糸蔵に金箔や塗りはない。爪裏は平取りである。天や野の丁寧な仕上げと対照的に、心はノミ跡が残る荒い仕上げで、斜めに亀裂が生じ

ている。心の根元には塗りがなく、先端5cmのみ摺漆が施されている。

胴について/胴巻きは一部破損しており、マスキ ングテープで留める処置をしている。胴は分厚く、 角ばった形である。内部は意図的に平坦に仕上げら れているようだが、特別な工夫は見られない。(1) 蛇皮線と同じく、木枠の上下で蛇皮に接する面が面 取りされている。胴巻きは左右で1枚ずつべっ甲を 使用している。象牙の鋲は左右それぞれ14個ずつで 合計24個使用している。(左側はほとんど外れてお り、残っていない。)べっ甲を鯨のヒゲと象牙の鋲で 留める構造は他のべつ甲巻き三線と同様であるが、 この三線のみに見られる特徴として、べっ甲の下に 挟む紙に龍の模様を描いている点が挙げられる。左 右それぞれに時計回りに旋回するように1匹ずつ描 かれている。三爪の龍で、躰に絡む火炎が朱で彩色 されている。透けるべっ甲の特性を活かした工夫で ある。本資料の製作時期は定かではないが、特別な 三線であることを伺わせるもので、非常に興味深い。 その他/カラクイも棹と同じくコクタン製と考え られ、六角形に面取りしている。先端が丸く削られ、 糸蔵の反対側に出るような仕様になっている。ナカ ジルのみ、他よりも短くなっているため、修理した 可能性がある。



図20 全体





図22 心



図23 胴右側面



図24 龍の顔



図25 龍の身体



図26 鋲

べっ甲巻き三線比較表

No.		1	2	3	4
名称		蛇皮線	三線(短)	三線	三線
所蔵館		東京国立博物館	徳川美術館	一般財団法人沖縄美ら 島財団	東京音楽大学付属民族 音楽研究所
製作年代		19 世紀後半	18 世紀後半	不詳	不詳
棹	法量 (cm)	77.5	67.0	78.7	79.7
	七型	与那城型の特徴をもつ	与那城型に近いが ウージルから曲がる	与那城型に近いが ウージルから曲がる	南風原型に近い
	素材	コクタン	コクタン	コクタン	コクタン
	棹の塗	呂色塗	摺漆	摺漆	摺漆
	糸蔵の金箔	有り	無し	無し	無し
	接ぎ	天、野、鳩胸、芯の 4カ所	無し	無し	無し
	銘書き	無し	無し	無し	無し
	爪裏	総取り	総取り	総取り	平取り
胴巻き	べっ甲の幅	4.3 cm	2.6 cm	2.7 cm	4 cm
	べっ甲の数	4枚(猿尾の上下を 足すと6枚)	2枚	2枚	破損しているため不明
	鯨のヒゲの数	7本	2本	2本	破損しているため不明
	鋲の数	20 点	40 点	28 点	28 点
	鋲の形	半球形	扁平な半球形	扁平な半球形	扁平な半球形
カラクイ	素材	コクタン・象牙	カリン	コクタン・象牙	コクタン
	形	六角丸溝 象牙飾り	六角	六角象牙飾り	六角推
	図				

4 考察とまとめ

以上のように、胴にべつ甲を使用した三線の事例を4件紹介した。それぞれの特徴について「べつ甲巻き三線比較表」にまとめた。蛇皮とべつ甲の間に和紙を挟み、べつ甲の上下に鯨のヒゲをあてて鋲で留める構造は、今回調査した4件で全く同じだった。胴巻きが同じ構造であるのに対し、棹に決まった型の統一はみられなかった。(1)蛇皮線は与那城型に近い特徴をもつ。(2)三線(短)と(3)三線は非常によく似ており、どちらも与那城型に近いが、ウージルから湾曲する点が与那城型には当てはまらない特徴である。また乳袋に膨らみがある特徴も一

致する。付属品を除き、棹と胴の細かな点で多くの 共通点をもつことから、(2)と(3)は、同一工 房である可能性も考えられる。(4)三線の棹は南 風原型である。またべっ甲の下の和紙に龍を描く点 は、この三線のみに見られる特徴である。三線製作 に絵師が関わった記録はないが、今後改めて研究す る必要があるだろう。4件を総合的に比較したとこ ろ、(1)蛇皮線とその他の3件(2)三線(短)、(3) 三線、(4)三線では、仕上がりに明らかな違いがあっ た。(2)、(3)、(4)は、棹の仕上げがシャープ で、技術の高い職人が手をかけて製作した様子がう かがえる。また3件とも摺漆で仕上げる点が共通し てる。また胴巻きもべつ甲や鯨のヒゲを左右で1枚ずつ使うなど、左右対称に仕上げる意識がみられる。 鋲も、1点ずつ均一に扁平な半球状に削り出している。対して(1)蛇皮線は、棹の4ヶ所に接ぎがある唯一の特徴をもつ。さらに呂色塗りで仕上げ、糸蔵の内側に金箔を施す。呂色塗りは摺漆よりも棹の強度を上げることが可能である。胴巻きは、左右で2枚ずつのべつ甲を使用するが、繋ぎ目をそろえず、左右非対称に仕上げている。鯨のヒゲも計7本をバラバラにあてがうなど、均一性がない。鋲は半球状で、1点ずつの大きさに若干差がみられる。その場にある材料で工夫して製作した印象が得られる。なぜ(1)蛇皮線とその他の三線にこのような差があるのかについての考察は後に述べる。

以上の調査を通じて、べつ甲巻き三線とは、どの ような三線なのか、2つの可能性が考えられる。ま ず1点目は、外交で使われる特別な仕様の三線だっ た可能性である。べつ甲巻き三線は、現存する5件 のうち4件が県外所在である。唯一、県内に所在す る(3)三線も、付属品が本土の三味線の形態となっ ていることから、県外に渡っていた可能性が高いと 考えられる。では、べつ甲巻き三線はいかにして琉 球国外へ渡ったのだろうか。伝来が明らかな(2) 三線(短)は、寛政2年(1790)もしくは寛政8 年(1796年)の江戸立で琉球使節団から献上され たことがわかっている。他の3件についても、第一 に考えられるのが、江戸立で大和へ持ち込まれた可 能性である。琉球漆器のように輸出品であれば、よ り多くの作例が現存しているはずなので、もっと限 られた機会でしか流通しなかったと考えられる。特 別な外交の場である江戸立の一場面で演奏される歓 待用の楽器として製作されたと考えれば、特に手間 をかけた胴巻きや、角が立った丁寧な棹の仕上げに 納得がいく。演奏のあとに献上される場合もあった と考えられる。

次に、三線を含む四線、琵琶、月琴などの楽器群のうちの1点として作られた可能性が考えられる。(2)三線(短)と(4)三線は、琉球楽器ないし明清楽器群のうちの1点として伝来している。このことから、三線として単体で使用する以外に、他の楽器と一緒に演奏することを前提に製作された可能性が考えられる。これを併せて考えても先に述べた

江戸立や、中国からの冊封使をもてなす歓待芸能な どと関連して製作された可能性があるだろう。

最後に、製作年代について考察する。調査した4 件のうち、年代がわかっている中でもっとも製作時 期が古いものは、(2) 三線(短)で、18世紀末で ある。対して、最も新しいものが19世紀末に収集 された(1)蛇皮線であることから、少なくとも 100年間は胴巻きにべっ甲を使用する技術が琉球国 内で継続されていたことがわかった。そして、今回 の調査で明確な差異が明らかになった(1)蛇皮線 とその他3件の違いは、製作年代の違いと捉えるこ とができる。仮に、べつ甲巻き三線が、王国時代の 外交の場で使用される特別な三線だったと仮定する と、(1) 蛇皮線が製作された19世紀末は、琉球王 国が崩壊しているため、従来の役割を失っていたと 考えられる。しかし、べつ甲巻き三線の様式は継承 されていたため、製作が続けられていたのだろう。 それぞれの時代を反映させたべっ甲巻き三線という ことができる貴重な作例である。

以上のように、本稿では、現代において一般的な 三線の胴巻きと王国時代の胴巻きの違いについて問 題提起をした。その上で、今だ充分に知られていな いべっ甲巻き三線の事例を4件紹介した。先に述べ たように、三線の胴についてはまだ研究が進んでい ないため、今後、より包括的な調査を進めていく必 要があるだろう。そしてべっ甲巻き三線の現存例を 県内外・国外で調査し、意義や役割について再検証 したい。さらに、失われたべっ甲巻き三線の技術を、 琉球王国文化遺産集積・再興事業で模造復元するこ とで、製作技術を解明することが期待される。現在 製作中の蛇皮線(模造復元品)は、令和3年3月に 完成予定である。完成後、報告書でその成果を報告 する予定である。

謝辞

琉球王国文化遺産集積・再興事業で三線の復元をするにあたり、多くの方にご協力いただきました。東京国立博物館所蔵「蛇皮線」の調査に際しては、竹内奈美子氏、福島修氏、品川欣也氏、三笠景子氏にご協力いただきました。御礼申し上げます。また、徳川美術館での調査に際してご高配いただきました吉川美穂氏、薄田大輔氏に感謝申し上げます。東京

音楽大学付属民俗音楽研究所では、金城厚氏、甲田 潤氏、稲見惠七氏に調査をさせていただき、資料に ついてご教示いただきました。心より御礼申し上げ ます。最後に、三線について常に多くの示唆を与え てくださる園原謙氏に、感謝の意を捧げます。

参考文献

沖縄県立博物館・美術館『三線のチカラー形の美と 音の妙ー』図録 2014

園原謙2020「琉球王国時代の継ぎ棹三線の技術について-東京国立博物館所蔵「蛇皮線」のCT画像の解析を中心に-」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要第13号』沖縄県立博物館・美術館p73-84

注

- i 模造復元とは、ある作品について調査・研究を重ね、製作された当時の姿を忠実に復元したものを新たに製作することを指す。製作においては、可能な限り製作当時と同じ材料と技法を用いる。
- ii ①園原・長谷川・岡田・上江洲・大山・門叶・園部・山田千里・本多・宮腰 2018「旧円覚寺仁王像復元制作に関する研究」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要 第11号』沖縄県立博物館・美術館p67-110
 - ②大下・下山進・下山裕子・宮城・與那嶺 2018 「琉球王国文化遺産集積・再興事業における染織資料色材分析調査報告とその成果」 『沖縄県立博物館・美術館紀要 第12号』沖縄県立博物館・美術館p93-112
 - ③2019 「琉球王国文化遺産集積・再興事業」『沖縄県立博物館・美術館年報 No11』沖縄県立博物館・美術館p51-52
- 5件はいずれも沖縄県指定文化財の「三線 盛嶋 開鐘附胴」、「三線 志多伯開鐘」、「三線 富盛開鐘 附胴」、「三線 拝領南風原型」、「三線 江戸与那」 である。
- iv 模造復元する上で、手本となるオリジナルの作品 を指す。
- * 佐々木利和・萩尾俊章・與那嶺一子1996「農商 務省より獨逸宛の沖縄関係物品目録について」『沖 縄県立博物館紀要 第22号』沖縄県立博物館・美

術館p1-30

vi 首の近くは伸びやすいため、現代では、ヘビの尾 に近い部分を使う方が上等とされている。